

学力形成と評価について

宮崎 冨子(東京経営短期大学)

I. 研究の目的

2002年度から、学校教育においては週5日制、教科内容の30%削減、基礎・基本の徹底、新設「総合的な学習」、絶対評価等による授業が展開されている。なかでも、「総合的な学習」の評価は、教科学習の成果を総合するとして期待されているが、現場では評価方法が確立されていない状況である。本論では、児童・生徒の学力形成と評価の考え方として、能力開発の構造化を提案する。(表1～2)

II. 研究の方法

2002年2～8月、「学校教育における学力形成」について、小・中・高等学校教員対象のアンケート調査(配布400)とヒアリングを実施した。質問紙の有効回収率は15.5%で、きわめて低率であるが、寄せられた回答は生々しく、現場の問題点を浮き彫りにしている。ここでは、小学校教員の記述式回答を基に、学力形成と評価について検証する。

また、児童・生徒の能力開発構造化については、ギルフォードが提唱した「①知的素材/領域：行動/概念・記号・図形、②知的所産/内容項目：単位・分類・関係・体系・転換・見通し、③知的操作/はたらき：認知・記憶・集中思考・拡散思考・評価」を3次元で細分し120の知能因子を想定した知能因子構造説(1956)に基づき、本論では知的所産/はたらきとして概括される「認知・記憶・集中思考・拡散思考・評価」をおもな知能因子として位置づけ、誰もが持っている一般因子(一般能力)、物事をやり遂げるために表出する能力領域、生涯発達課題等を構造化した。

III. 研究の結果

1. 最近の児童が以前と比べ指導しにくい理由

理由の1位に「親の価値観の多様化(27人)」を挙げ、「価値観が変化している中で育つようになり、子どもたちも多様な考えを持ち、自分の考えを中心におくようになった」という。ついで、「自分の子どもさえよければよいという考えで、親も子もわがままで自己中心的な言動(15)、家庭や社会の教育力の低下

(9)、年齢に応じた基本的ルールやマナー等基本的生活習慣を身につけていない子ども(9)が増え、耐性力が不足(5)し、集中力が持続せず、じっくりと物事に取り組む子どもが減ってきた。テレビゲームの影響で乱暴な言動が増えるとともに、人間関係が築きにくく、学力差も広がっている」という。

2. 基本的生活習慣や学力定着のために家庭に望むこと

基本的生活習慣の定着には、「食事(12)をきちんととり、寝る時間を確保し(8)、生活をリズムカルに(8)、挨拶(7)、けじめ・しつけ(5)、持ち物の管理・かたづけ(4)」を望み、「礼儀。排泄等のエチケットを身につけさせてほしい。親の都合や勝手に子どもを扱わないでほしい」と望んでいる。

学力の定着には、「家庭学習の時間の確保・習慣づけ(14)、宿題を一緒にやる(11)ことが大切、基本的生活習慣の見直しや規則正しい生活が必要(5)、読み書き計算の反復練習(4)、復習の見直し・確認(4)、相手の顔を見て話を聞く(4)、自分の思いを話せる(4)、声かけ・見届け(4)、子どもの話を聞く時間をつくる(2)、指先の細かな作業(紙切り・粘土細工)をさせる(2)、幼児期から本の読み聞かせ(2)」などを挙げ、家庭学習でも授業のフォローアップを望んでいることがわかる。

3. 児童・生徒の学力形成面での問題点

学力形成の問題点として挙げられるのは、「ドリル・プリントなど反復を嫌がる(13)、落ち着いて取り組めず飽きやすい(7)、読み書き計算も苦手のまま(6)、個人差が大きい(5)」という。人数は少ないが、「基礎・基本と言われながら反復学習に時間がかけられない。正確さとスピードが要求される読み書き計算も得意にならない。読解力・語彙力が不足」と指摘している。こうなると、堂々巡りの悪循環となり、学力不振の連鎖から逃れることができなくなる様子が伝わってくる。

「学力以前に人の話を聞くことができない」「学習内容と時数削減により、学力定着が不

十分なまま次単元に進まなければならない」など、学習内容や時間数を減らした結果について記述している。

4. 教員の立場で工夫している実践例

実践例としては、「朝の自習、休み時間の補習、放課後の補習、個別指導、宿題などでフォロー。漢字5問テスト、豆テスト、5分間テスト、ゲーム的テスト、ボクシング式ドリル学習(1ラウンド10分)、がんばりカード、九九や漢字プリント、よい児童のノート公開、毎日の本読み、グループ学習、チャレンジタイム、反復練習、国語辞典の活用日常化、興味を引く手だての工夫、ゆっくり読ませる」などが書き込まれている。

5. 学力面で伸びる児童・生徒に共通する特徴

回答者49人中20人が「学習への意欲、興味・関心」と答えている。ついで、「集中力(11)、努力(9)、親の協力・家庭の意識(9)、忍耐力・継続力(9)、話を聴く力(8)、繰り返し学習(7)、性格(6)、生まれつき(5)、生活習慣の確立(4)、面倒くさがらない・丁寧(3)、

学習方法(3)、チャレンジ(3)、自尊感情(2)、情緒の安定(2)」などがつづく。

IV. まとめ

アンケート調査から、「学力形成は、教科の基礎知識・応用力だけではなく、人としての自覚や日頃の生活態度、基本的生活習慣、家庭学習でフォローアップすることなどが補完的に関わっている」という結果となった。即ち、「学力形成以前に人の話を聞くことができない。落ち着いて取り組めず飽きやすい。反復練習をいやがり、読解力・語彙力も不足」という指摘のように、児童・生徒の生活全般が学力形成に大きく関わっているといえる。

そして、児童・生徒の知能因子・一般因子をベースに複合された状況で表出する能力が評価対象となる。その際に、教科の基礎知識・応用力、身体・運動能力のようにテスト等で数値化して見えやすい能力領域と、数値化しにくく見えにくい能力領域とが有機的に構造化され評価される必要があり、全人的な評価をしていくうえでも重要である。

表1. 児童・生徒の能力開発構造図

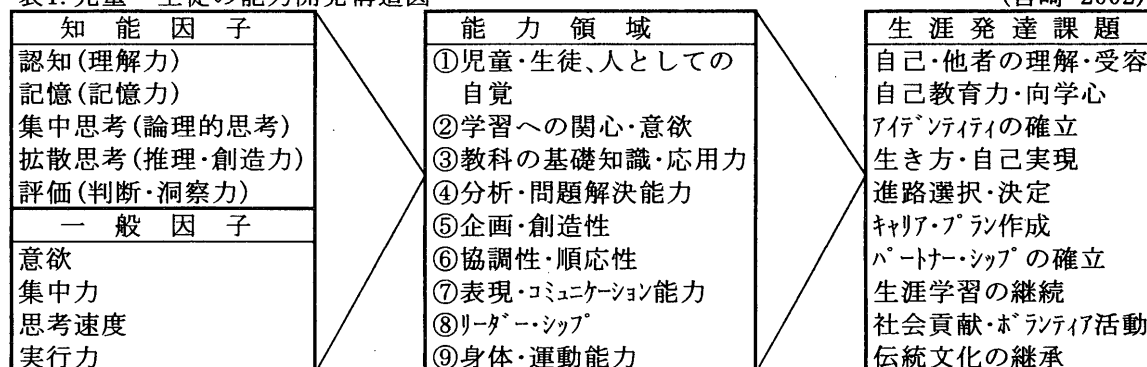


表2. 能力領域モデル

(宮崎 2002)

能 力 領 域	モデル(評価の観点、行動の記録等)
①児童・生徒、人としての自覚	基本的生活習慣。健康保持。公正・公平。公共心・公德心。生命尊重・自然愛護。校則・指導等を素直に受容する姿勢。自律心等
②学習への関心・意欲	学習への主体的・積極的な関わり、最期までやり抜く意欲。責任感。行動力
③教科の基礎知識・応用力	読み書き計算等、学習の基礎・基本知識。学習分野に関する専門的知識・技術。得意分野の深耕。資格取得等
④分析・問題解決能力	情報収集・分析・整理・活用。課題発見・解決能力。的確で敏速な実務処理等
⑤企画・創造性	目的に合う企画・提案力。創造力。斬新な発想・アイデア。改革力等
⑥協調性・順応性	目標の共有化。チームワーク。他人への思いやりと協力等
⑦表現・コミュニケーション能力	意見の伝達。周囲の声を傾聴。プレゼンテーション能力。挨拶・言葉遣い等の基本マナー。円滑な人間関係。人的ネットワークの活発化等
⑧リーダー・シップ	瞬時の状況判断で最適な行動。問題解決に必要なクラス内外のマネジメント調整能力。率先力。集団の指揮等
⑨身体・運動能力	積極的に体を動かす。瞬発力、持続性、リズム感がある。健康に留意する等

参考文献:伏見猛弥『英才教育のすすめ』(社)英才教育研究所1992、仙崎武・池場望・宮崎冴子『21世紀のキャリア開発』文化書房博文社2000、宮崎冴子『21世紀の生涯学習』理工図書2001